特116
714

補增訂改

流世觀

當盤謠本

鞍波
兼平
千手
京都築小町
江葉將

二

始

特116
714

正月 神祇 初能

難波

前シテ 老人 ツレ 男
後シテ 王仁 後ツレ 天女
佐序破急揃 所ハ摂津 ワキ 三大臣

脇三大臣
高砂ト仝断

次第 ツヨク
山も霞て浦風も〳〵浪閑[illegible]
ありきわ 當今よ
つかへなる臣下也我三熊野を信じ
毎年どしで参り仕候此度ハ所願
成就し年の如く参詣申候
今都よ下向仕候 春立や空

シテワレ 故髪 顔髪耳目 皇六口
水衣 腰帯 男扇
杉箒持

太夫 高砂 同前
但シ 杉箒持

も乃どけきさゞなみ乃かく波の
吹上の浦伝ひして行程に
ほどもなく紀路の関越て是も都の
津乃國の難波の里に着きにけり

真ノ一セイ
君が代乃ながら乃橋もつくるなり
波乃春も幾久し　雪ふるも梅乃
冬籠りしとは春への氣色かや　天

長く地久しく神代の風長閑にて
つゝり皇乃かしこき御代乃道ひ
ろく國をとめ民をまづ四方に治る
八嶋の浪も照日の本の歌の
成時とかや是自ら治まれる
萬代を祝ふなる四方の春とき白雲
あさくあまつ日つぎの調め

ぞとよちまもるや都の鄙なる代を
ありがたし。所人の
まもる賤の男はかく
見れば成老人よ寿ぬべきかな
方乃ゆるしていろ行末ふるく作ゲ
ゆるさや諸末社多き中よ光成
梅乃木陰を立さしてて陰を清め

賞賜ふ不審也。若此梅ハ名
求めてんか所なを見なれば都
乃人ゆく所作ゲ此梅乃浦ゆ
して色なるる梅花をも染てゲ名
求しれ所寿ハ成ものさやうよそ人
出人大方の花ずゑの感ハ多き
きたぞ中ゆ始あれば梅花を花

乃兄とも（シテ行）「其上梅の名有く
國に有ハ多き花穴（ウヲ）義乃始のそく
寄ふも。雅俗乃梅こそ續き当れ
時代もひらきし（カルル）栄花とひ（シテ行）あ風
ねこそ花の佳信（シテスカル）と云。どふもしかくふもつ
乃國雲ぞやうんやとぞ雅俗つよぷつを
えらく哉や此花を（ウ）欲ふとのち寿ハ

事ぞ（ヘト）きゝ法師（ワキ行）「ゆゝ雅俗
の梅乃ゆゝ名求ル俗と寿ゝ思ち
成きる同ぞうかぞきだうたふも雅
俗づよぷや此花を（ゴモ）龍ぷ乃きゝ
と哉やて乃花ゆきをがきてよめふ
哥乃心をめわるぞ（シテ行）「ゆ社帝
をとゝ乃心詞を顕きてきぷ雅俗

乃ちよハ宮ちかぐ。ぬ位よりき給
ちゝのべみを咲梅乃花のごとく開即位
ありて難波の君乃位よ傳り給ふ
時に入り社稷乃花のごとく天下乃
きをとろくめをべしといまべと咲や此
乃ちの感ハ打ほぼぐきの帝と花よ
うへ乃ものしを浪も

上三四ハ
難波津よ咲やこの花冬ごもりに
ぬきいまべよ匂ひきて咲を梅の風
梅をあらぬみよりやうやうや津の國
乃ちよハのちよりよ豊ちる春の
御ゆくそ道廣き治めあれ
打難波づの三ハ帝乃徳を津
山乃ぬまハ咲ぬ

シテサシ

唐國の荒廃の世代もてそう
ぞ。が樣のまゝ
ありごとはぐやかよ
きて。悲哀の浪四海よ普くをさめざ
かい、よかた日ゝ地
君くさせれば尼を糸
居名
水よく私をうふ
かやう高き屋
よのぼりてみきば煙つ邸のかまど
ぎたひよきりと數多よかきを海

三五

ゝ、ぐでいはえきる。獄き
べ此君の代よためをひくるも
ぐ紅きみとのり國よあまぐ
三年ひ周りまち。歌年月も
極まれ。涙の玉砂の数つきり
て。ぞこ豊年れ調物かるひ故やや
ぎ、ぐやまちよもぐ寶の子

秋萬葉乃ぞ、このおもを先、くまづ
紅まさば善き潮心のぞ深
してぞ鴻乃おまで深きわくぞ
き時恵を筆ば山乃ぞ出
ぎ古歌ば大君乃國ぞ求
し栄えき津乃國の梅
乃ぞ牡丹ぞ四方ぞ善く

花ひらけば天下道歌ぞ那代
乃牡丹ぞ世乃中ぞ花ぞ栄えき
ぞの昔語ぞ面白き
あ鶯ば津ぞ鳥乃色ぞ
鳴鶯乃中ぞ曲春ぞ
不思議ぞ心有花

の きよく 常盤、夢とうつつ 絵にかくべき
我が知るや 此梅の 雲年々の 花の
精 北 と 一人の 若べ 言葉 へうぞ 顕を
鶯は 津国 月 咲 やはり 山花と 詠 つ 位を
もとめ 申 百 海 国 の 玉 仁 あ わ や
ぬ 敷 きこそ 物 り の 色
なり 鳥の 舞 の 曲 おもしろ

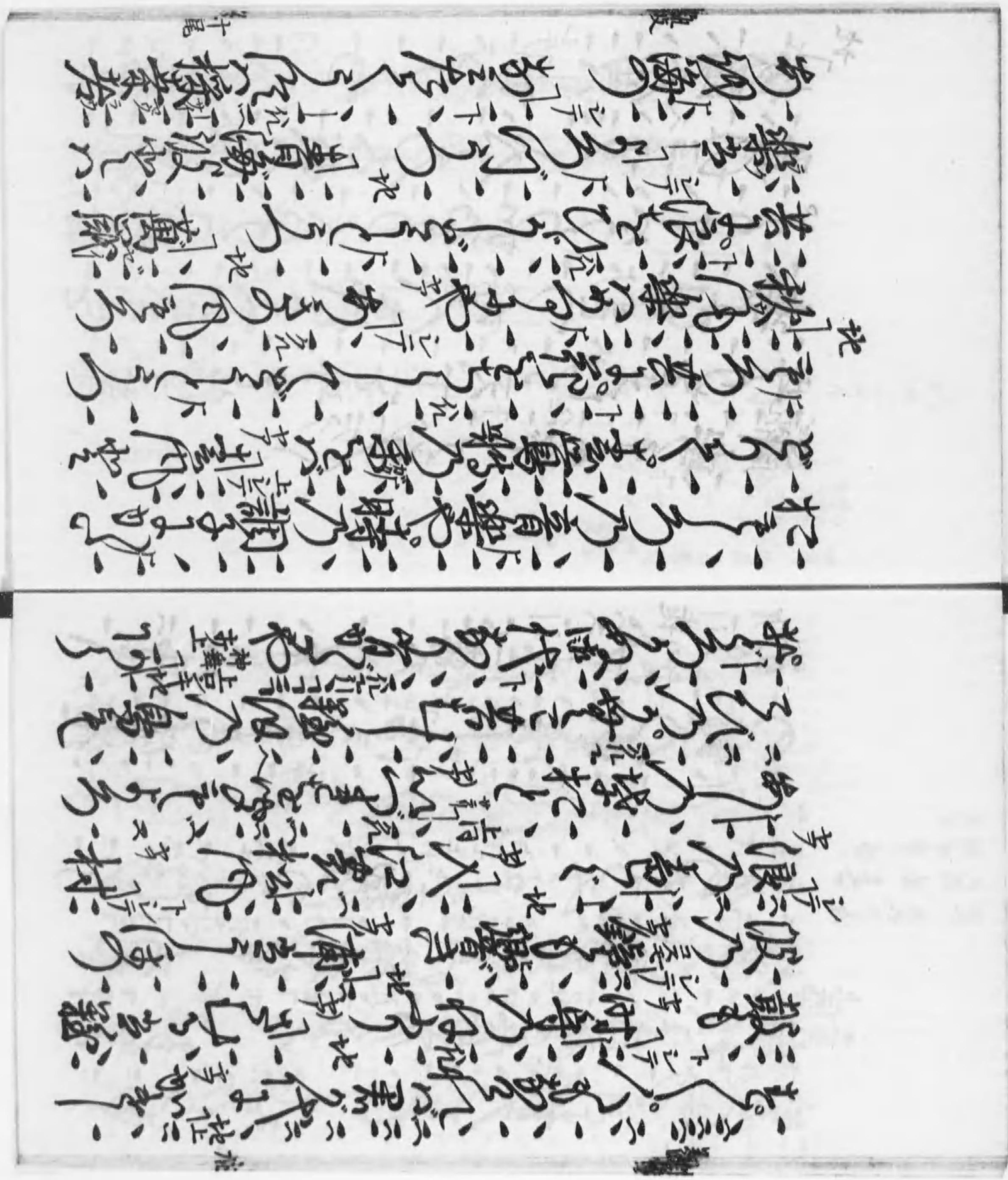
後太夫
面白き事なり 能野男
其他 高砂 ト 仕ジ

慰めやべ や 法 師 して 物 語 へ 花 の
ま ぶ し よ 侍 へ 口 上 言 か て 言 た
花 の ま ま よ 歌 舞 お の 月 景
と も て 国 な る 氣 な ま て 音 樂 の
花 よ ゆ る ぶ 咲 ち よ 花 誰 う
ひ ー 去 の 又 ま ま 東 よ り 来 れ や い へ
た 南 枝 花 初 て 用 ぶ 寒 ハ 有 も 西 の 海 ふ

向ふ離波乃、春の夜の月雲もなむ
浦乃浪、よるべ、ゝ面白や、髪も
ヘト　天安上
ながえ、ゝ、浪ふまよ、長く紐乃浦
よ年を、へ、ゝ、ゝ、ゝ代、乃恵みを
受、ゝ、此、所、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
レテ
我君を、百、海、風、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
をながめ、国を、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
指人

天女
面　増カツラ　帯
天冠　笏　色大口
腰帯　袴衣　カツラ扇

所ノ上也　二月上也
ありけ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ヲ上ル　ヲ
の鏡乃影を写し、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ヲ　ヲ　ヲ
を、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ヲ　ヲ　ヲ　ヲ　ヲ　ヲ　ヲ　ヲ
ことのもゝ乃みどりの、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
上　ヲ上
めぐび、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
上天安
天王舞
梅枝よりき、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ヲ　ヲ　ヲ　ヲ　ヲ　ヲ　ヲ　ヲ
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ



地

撥頭乃曲へ

せひ手よく

よりていうう

楽ひきつ

守りをさもる

羅楽

入日を招き

太鼓の浪あれば

かなりくいうう

代よ出

天下を

天下を治る萬

四月 修羅 二番目

前シテ漁翁 後シテ業平 ワキ 僧 所ハ近江

ワキ 着流 行脚僧

第

行脚を

より出る僧

門前をづ

野原の狂

杖ひ入り

業平が原へと

太夫
着流尉
舟ニ棹ヲ持セ出ス
一声ニテ出舟ニノリ棹ヲ持テ謡フ

信濃路や。きそのかけ橋かけてなを
うつゝ其跡とふや道のべの草の陰
なからん跡の名を重ねつ日を添てゆ
きべ旅路あくの近江路や。矢橋の浦に
みぎりく世業とざまうきをも
身よつ世業舟や。たゞあけくれのよるべごゝる
渡しあかす其私に便船やわう

なり　是は山田矢橋の渡し舟にて
もあり渡し守積たる舟にて旅
に便船を請ひまし　であるも業舟
とのやて候へ共折節渡りに舟もなし
志出家の事にて候へば利益に舟
を渡て給り候へ　二たびも出家の体
かいゝおれば。よの人に替り給ふべし　うへ候

經よりも渡得船　身を迎ふる樣が
かゝにしも　而海の
乃られかまれても　衛への御も
天上矢橋を渡る身あらばぞれは
身也　是はまづ浮世をわたる渠身
乃ごく手されぬ袖もこわき撰れ勢
まあ人なれど法乃人みてまう面をぞ
戒をばいうで憐むべきとゝめされ

二

なく如何にも頭殿よりくきこゆる
みし廣りあらる南山ハ皆名所にて候
作らせ給ふ法教へ　さ給ふ皆名所にては
寺の教やうべし　向ひに當て
大比叡乃みそはね比叡山のあ
とは比叡山まて王山王二十一社
おぎりたる峯は八王子　坂本

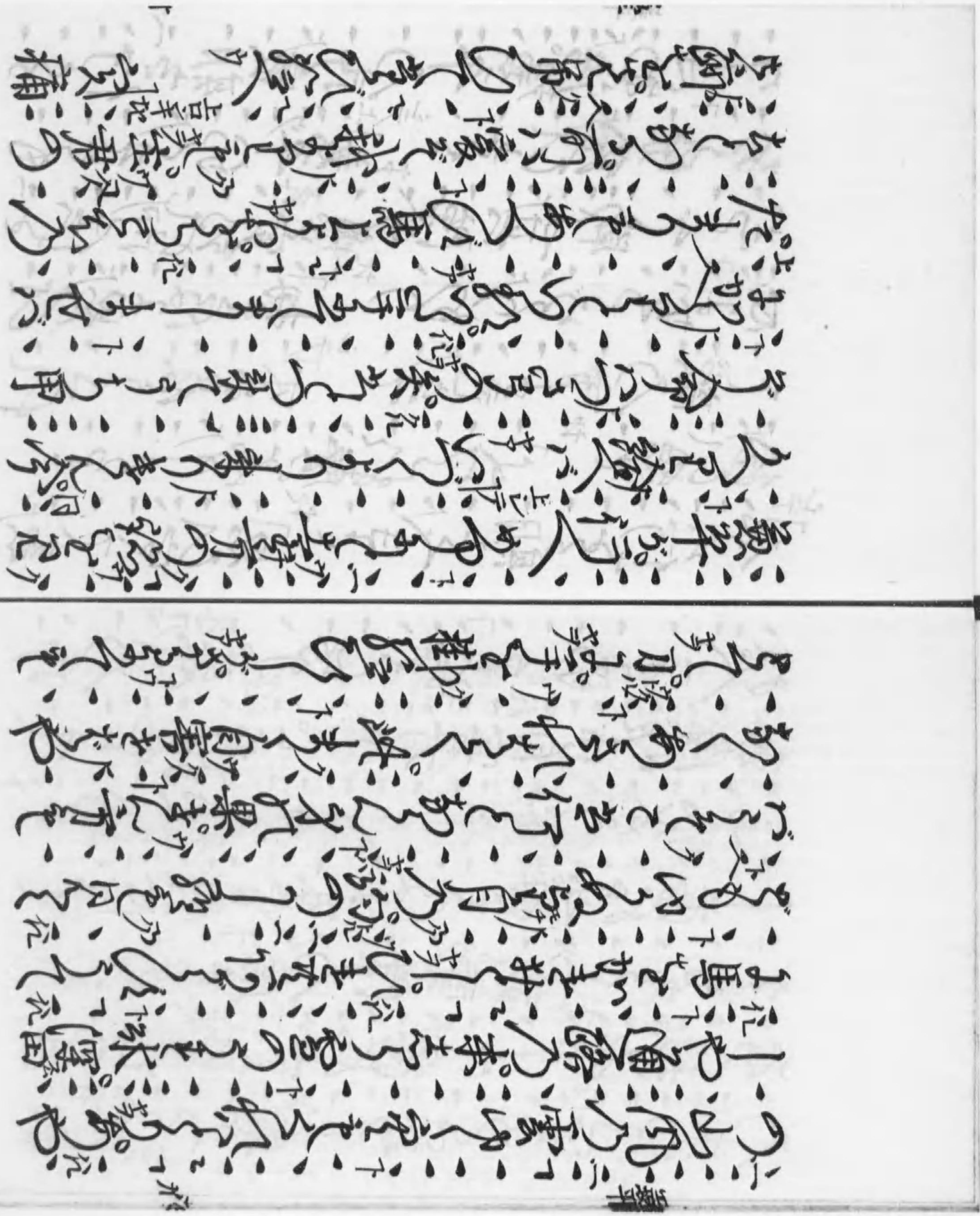
乃人家を砌おもてに
比叡山の城ようろうとして當りてハ
よりて中〳〵の事なり我山ハ城
乃鬼門を守り惡魔を拂のゆゑ
一仏菩薩乃所と申ハ伊勢の太山を
ハじめとして天台山を号もつぶ震旦の
四明の岡をうつして傳教大師桓武

天王と古仏をおもうつして巨厝年
中乃ぶちよ剣我〳〵祈誠ぶひ
し根本中堂乃山上点弼〳〵みて
て作り拙く大宮乃所在ハ〳〵どの
とゆゑんもの乃坂本ぶうつして作る
ハ中堂乃麓よ當てゆゑ陰
つゆ〳〵ハ弘大宮の所在ハ〳〵殿

みて此入る人　初月鏡や一切衆生、悉有
仏性如来とぞ聞ハ　秋がきりとも頼も
たのう社入　伊勢乃でゝゝ佛衆生通
ぢゝ　あれば　ゆ僧も独て隅ゝあゝ
一仏菩提　岸ゝよりきたやあの梢を
あらべ　薬師よ止観ゆゑ海を左へ
亦戒定恵乃三学をとゝを　三塔と
あづけ　入へ　ゝまる　一入会三ゝ乃機
を顕りて　三千人乃命を　を　圓
融乃法も　曇ゝ　朝の横りをみゝ
ゝりや　拙よ　麓ゝ　ゝ　亭
乃一神七社乃　興乃　乃　梢へ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

七歳し家をぞ、我ぞ、同敷
さ洗ふをぞ法乃舟よりうへて我をま
た彼岸よりつ、たゞ涙乃や
うりや有為無常の、ちまの数つて、きす
りやしを、かをりつく前人な不同髪乱泡
新たに咲て昼撞花一月の営
ぢ馬乃家よりを月のぞよ弱る

兵乃ゼ殿と申しく、不審なる泥江
路よりアとぞ「義平御田うしまりあ
ひて、よ三百余騎
戦当びくをて、主従二騎ようあ
きれ乃ぞ力あ、乃の松原よ高ゆきて
御腹召れんとぞ。義平すめやをぞ心
おそ二殿。業乃松原さ



つきあはせ、辛乃市家朝臣行ふ
あり、勢給ひきる、辛いかくそとも
ぬつて戰に其陸奥守供を
ぬよかくるづりあり 拙を侍よ思ひ
て敵乃市よ色立て 木曾殿うつれ
給ひぬと よびつるに聲をかけよると
今は行をう朝きべきと 思ひ定て 辛

辛乃 是ぞ家朝の言と 鐘ふん
ぞりし大音あげ 木曾殿の御内よ
今弁乃四郎 辛とおのりいきて
ぬ勢よりつくいぬ 大ようり 詰當
ぞ乃 和術を顯し 大勢を 業は乃
よ追つめく 議う小 浪まりぎり
蜘手十文字よ 折破りかき通して 其

ねぐ捐害の手本よとて恵力もなく
つゝ枕りき庵にもちてつかぬられ珍
み〻りぶりねひろが家後の志つぎ目を
捨ろろしありき庵ありく

脇　素袍烏帽子　厚板
大口　直垂上下　小刀
扇

三月　カツラ物　三番目

千手

位唐シテ千手　ツレ重衡
ワキ宗茂
所ハ鎌倉

ワキ詞「是ハ鎌倉殿の御内に狩野ノ介宗茂にて候さても相国の御子重衡卿は此度一ノ谷の合戦に生捕られ給ひしを某預りて候へども朝敵の御事と申ながらかゞ頼朝痛はしく思召れよくいたはり申せとの御事にて明日も千手の

太夫
着流女
浅葱繻子ナルガ吉

まへをつゝハけまして彼手にをとヤ
ハご手都乃長ゞもとめてんがゞうよや
さくしとてばオ色くろつゝハれいを
遣ハさわらゞ城よゆゝ強きいたゞよ
て序所ゞとロハよ雨中ちつきく
酒とをあやさゞやとあい（ニノ甘ン茶ノ）琴の音
うへくれとしづくゝ身やあゞまや

成発　さて書乃花の樹頭よりえ
秋ハ月の水鏡よ流しもゞのハれ
さのゆる様をみても気や室働の景
古へハ雲乃上かきてもちゝぬ乃
ゆくへ涙よたゞようひ毎ようさぶらゞよ
ゆゞへのようそゆゝでゞ者ようつる有様ハ
下三ニ仁ハ
ウ都よだゆもとゞめぬ涙ちゝると痛ハ

上三下 陸奥乃夷がつよ堺ぬ夜のころく
降りもきえける折しもあれ思ふ乃露
も袖をよ心花もあをしとおもをとらく
袖の色まぐもきつの夕乃ながらひ
うれしくめでよ葉乃やしきん
みて頼りなれ千手乃誓ぞしまりける
地 光さとはらん皆わ存へば機嫌をと
まつろくやむさうてもるゝては

ツレ 童衡
放髪 着附 大口
クワラ
初ニ出脇座ニ床木ニカヽル

童サン 抑是は槿
花一日乃栄命ハ蜉蝣乃定なきまゝに似
たり心を穢すが胡国よとらうれ岩窟
乃内よこめられて故郷を忘ぬ心ざし
光きゆうまゝありとしみて敵をもし
鶯里よ帰るが我いはれなく敵陣までめ
わく恥いきの責をかうむるましきよ

しや限りあらんあら定めあらやはらふ
やよひ千手乃ためまゐりまして 笑ふ
ハ行れ為みて御ぞよしく行すみても
あまぎよの對面へかなふまじきとや
長らく御めでたやんはしまりぬれ由やてふ
行と思へバ嬉しと思の御對面ハ叶ふ
まじき由仰出さるゝ 是も私ら

あらば頼朝よりの御使みて琵琶を
きかせてまゐりたりバ此由かきねて御
やりゝ 御使の趣やてんば是も
私よあらびバ頼朝よりの御使みて琵琶
琴持参てまゐりたりよしく御ハ琴
るまあれ甚けてあらすとあまぎれバ
其時千手立よりて 書戸をきゝて

と押ひらきみたちの直角ひらきて花
の都人よそづ[illegible]おぐらみてえすぐるや
東の国[illegible]人の心の奥深さ其情を
[illegible]紅葉の[illegible]紅葉の秋だに思ひ[illegible]
ありぬ流[illegible]いうよ千手のお[illegible]白地
よりつる出家乃[illegible]寺眠のるゆきうゑほ
ゆり社人[illegible]女房[illegible]由てえ[illegible]

敵[illegible]ありと私として出家を浮ま
さしも思ふまよりびと社ひつきわ
りも忘の押[illegible]まおもきてめ
[illegible]庵くとてえ[illegible]出家
[illegible]社[illegible]惜や我一
谷みていうもも叫べきオ乃ぶ捕き
びらい東乃国[illegible]ものが様よ面とら

ひとゝ前世乃報いとゝ云おもゝ（トカレ）ゝ見ハ
ぢも経命よりゝ仏像をゝ人壽
をたゝゝ現世ゝ罪を見ゝ都葉
より枯ゝ（上ハ）ゝ社ゝへ（上ハ）ゝ白ゝ（上ハ）
ゝ現ゝ去ゝ（上ハ）ゝ苔ゝ入ゝ
ゝ多ゝ者ゝ独ゝ獨ゝ敬ゝ
ゝゝ慰ゝ顔ゝ

あゝ（女）ゝ桜ゝ（女）ゝ花ゝ
ゝ日ゝ東ゝ（上ハ）ゝ（女）ゝ
ゝ月ゝ（上ハ）ゝ世ゝ蝉乃唐
哀ゝ訪ゝ書ゝ都
乃雲ゝ立ゝ（コヤラ）ゝ（ヤラ）ゝ
ゝ男ゝ嘆ゝ
き水ゝ川ゝ橋ゝ

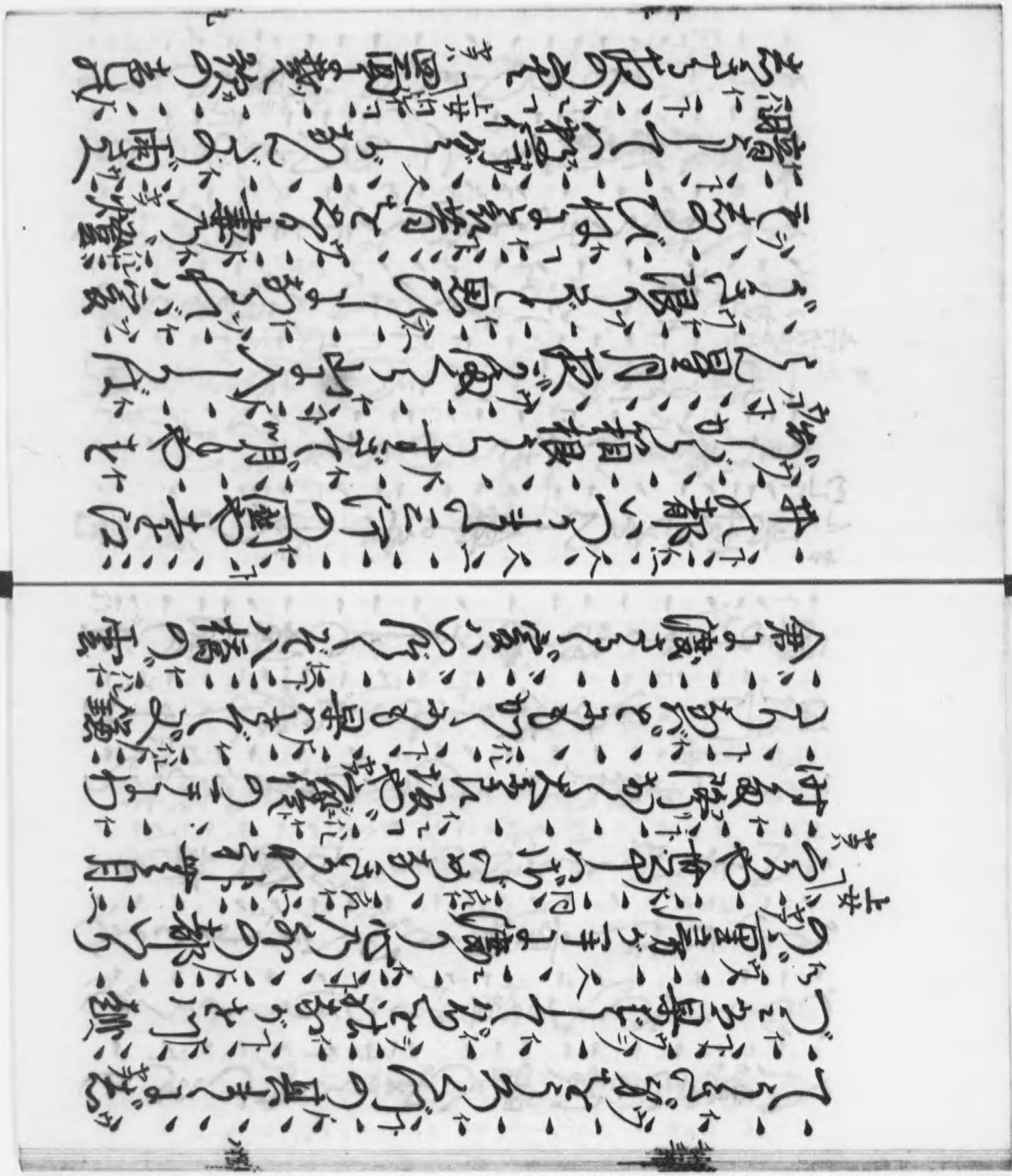
思へとかいきぬ情乃中〳〵よ訪るや恨成
説く　早カル　とは乃雨平のうれ〻を渚
つまく〻を慰めんと桜を抱きてしま
つ既酒宴を始んとす　女ニテキル　洲
由みるよりもぼ酌よ立て宣衡乃渚
前よりそしまりきれ　ヒ上　とろいたら
腰りのぶあらひなる思ぶもぶまづえ

ぎる面ぶ心ろ〻
りよ仁みくも部者ゝもむきべ
　女カル
真岡千二手とりあへども絞乃宣衡
たるぶ情ありきのもときつよねゝ
三人下　人ゝ徐〻絞の朗詠ぶ天れあるも小野
乃市作ぶ洲手詩を詠ぶ河人をも守る
べとの法師をあり　ヒ上　宣衡ぶ今

　呼今詠
　シテ　舞くる
　辰　此詩を　ニモ

生の白髪にて明朱世の優ふそぬまうほ
ふきれと宣べば わらはにとをりぎ悪を
りたぶ 朝詠まてぞがもぞ
きる 拙も彼宣働き相國の未れ法
ふとはやをたぶ 気味みも明き一へみも
きて 父母の冠 龍愛限あり ちまきた
附うつ平家れ運命悪く月れおもが

ぬ色そぬぬ やもとりの津國の生
田れよ卯を拾てをぎ歌とやせ
ども 森れ去すの栄れ弱ぶと
きれぎたうとれ風い梓弓
よ力あり宣働もびんともよ
づもぬをを簪るごとふくの
ぐれ悪たる宮 鯉ぬぬぐれつあり



上月（井改ノ仁）
痛つさウて宣衡物よりもウ
ゞ都ふうつべきの女房（シエ）に出
給へ（女上ノ用ヤヲ）ゝ手もも泣くくち出何ヲく
のくさ契りやまぬくよりもれぬ
仁（元仁）冬（元仁ヤスハ）露ちるくよ宣衡入る
祈りもあるくきぬぎきゝ

陽
着流僧二人（ワキツレ）
公

幸都婆小町（位序破シテ小町ワキ僧ツレ僧）
山城（所ハ山城）
山ぶかさきよかりけるのくく深草や
心ゆく（早ハ）見ぬ高野山よりとして
ゆくゝ僧ゆくゝ我洛度都よりの
きやと思ふ作（サシ）　まえ前仏を既よりり
ば仏ハまゝ世（ハ）出（ハ）夢の中ゆよ
生れきて行を現と思ふべきだまく

麦籾さ人間と生まれきの如き業れ
仏教にあひたるもの尼そ
報なると思つ尽もうくあるべ雲の衣は
才知者てう　上言　はれぬ先世界をとし
きよう〳〵懈せ　親乃
なきれい新馬よごろをとしるるを
御ウ　ぶ屋と行も主をうしひ野より

太夫
面箱を挑髪　笠
勝巻　水衣　杖

山は消えれ是そまこの梢あり〳〵
雪ゆりきれ　それやらいうへぎう
まんをつもれ翡翠の羽
ぬるとたをやうふて楊柳乃玉の風は
あひくうとしよ賞音の狩りへ露を
合ゆると義の　かとりよ教そむる

さるよりも、なほ、めつらしく、やどの民間さう
ぞめきへきこえまれば諸人は恥をきし
ぼりかねぬ月日のうつりて百年の
時とゆくに都の人目つまりや若
もそれとうたまくれ月法衣よ
出るゆくゆくは雲井もちまや大内山
乃山寺もかくうきの才やうもとうめり

トニ、イル、コトヲ、
ヲ
でかくれてよりあやう、鳥羽乃意塚秋乃
ニトヲ
山の月のうつるの河蒙舟ごきゆく人い
ニテ河
ほや覚く　ほよ参りうん寝よ是
ニテ
なる行末は腰をかきて休まりやと思ひは
冊河
冊つきや日乃暮ては道をとかうまれ
そそやこれ成ち大食の腰うきたるを
びく辛苦はまくは教化してすきう

まさしくそれは是成仏ある人おことの
腰かけたるはかたじけなくも仏躰色
性のそとはにてはなきかそこ立のき
てよの所にやすみ候へ　シテ　仏躰色性
のありかたきとは宣へ共是ほとによ
字もみえずきざめる像もなし唯朽
木とこそ見えたれ　ワキカヽル　縦深山の朽木なれ

ども花咲し木はかくれなしいはんや
仏躰にきざめる木なとかしるしのなかる
べき　シテ上　我も賤しき埋木なれど心の花
のまだあれば手向になどかならざらん
扨仏躰たるべき謂はなにとよ　ワキ上　夫そとはゝ
金剛薩埵仮に出世して三摩耶
形を行ひ給ふ　シテ　行ひなせる形はいかによ

地水火風をして五体を備へ人の形
ぐしよ備はるべきうつし像にそれなれば
ひとへに功徳の替るべし 偖てまた
乃至とくいうよ 一見卒都婆永離
三悪道 一念発起菩提心ぐそくもい
かでかうたがはんべき 菩提心あらんあと
浮世をいとはんもの 浮世をもて

きそ あるそしいよいようつくしたき
けうくはあるとも 礼をはおさへたるそ
中陰の卒都婆 ぜやもをへ
告いう 順縁とそうまたり
逆縁ありと 拠法の悪も

観音の慈悲

縁持つ愚癡も文

殊の智恵あるくといつも善あり

煩悩といつも善提也　菩提とも

植木よあり　明鏡又　臺よあり

宮大寺衆一物あるき附ハ仏も宮まも

隔あり元よりもつの凡夫を救ふ

為の方便のつ　誓の願あれハ逆

縁あり浮つくしと。惡よりをハ仏よ

ちと釣る非人あり。僧ハ人を

地よつきく三度礼しをくハ　秋ハ洪

附ちをひ物たつきの子とう母を慈

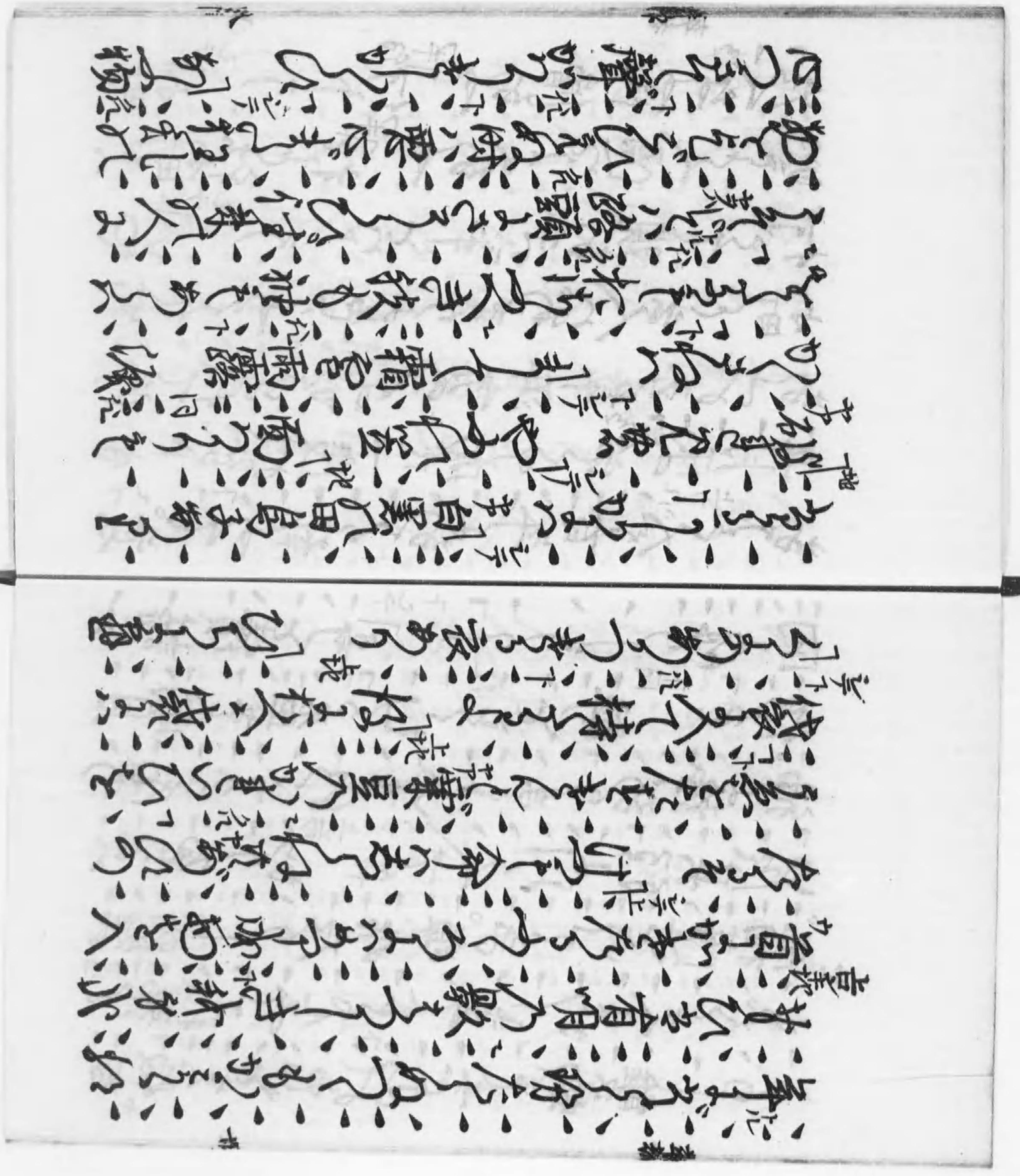
楽のうあるハ人ハ　かつ

仏うハ者　カミ　ハ　そつ　芸僧

ハきけやしく　梅ちとハつ成

人うゑをはなれ雲うゑ（シテ付）
若をうゑ雲へ（上）しでまきは出羽の那司
が野良ゑうむとめぶ野小町うあわる
もてゆくさまつふあるも（カケココニテ上）痛つやま
小町ぢいう人遊女あて花の像
町やきぢ桂の眉墨あて白粉を
絶さひぢ縁乃衣ばまして桂殿乃

同よりうつ（トシテ）寄と續詩を
作る（下同）（元ハ）醉をもとむる盃を同月
独よ詠ありまとつうるうさ夜の（上ニ）
月其狂よりうへて（ウヤ）かり色をみれば
霜蕭をとうき。蟬暗たり一西鶴（キヲ）
もぢくよりきてもんみれ歌（元ハ）
うし雙蝶を山の色をを袖百（ヤ）



たべなう御僧なう（ワキ）何事ぞ（シテ）小町
がもとへ通はうよなう（ワキ）汝こそ小町よ
何とて現なき事をば申ぞ（シテ）いや
小町と云人は、あまりに色が深うして、あな
たの玉章こなたの文、かきくれて降
五月雨の、空言なりとも一度の返事も
なくて今百年になるが報うて、あら

人恋しや、あら人恋しや（ワキ）人恋しい
とは扨御身にはいかなる者のつき添
てあるぞ（シテ）小町に心をかけし人は多き
中にも殊に思ひ深草の四位の少将の
恨の数のめぐり来て車の榻に
通はん日は何時ぞ夕暮月こそ友よ
通路の関守はありともとまるまじや

いそたち（物着）浄衣もあらいとく
浄衣の袴かいとりくやどそをほを
かさもり狩衣紙をもち加りて
人めも忍の通路のかもも行やをも
けくるのおもひもひとりそでの袋時
雨雪ふり行乃むゆどをく
ゆきぐ行て八海りていゆきの一夜

二夜三夜四夜七夜やようのよ豊
乃明の節会あもあもてそかよあ
庭とりの時をもうひ曉のおくの
もしかき百夜まてとひいてひ九
十九夜よりるあくあ
月まひや胸らおやと出ひて
一夜をまて邪きりし深草乃

作物山　紅葉ヲ抑ス
ツレ女二三人
着流女
左文
着流女

位序　急後シテ　鬼神　ワキ　惟茂
所ハ信濃　男

シテ女　ツレ女

囃子　ツレ女　月時雨　ヨワク

紅葉将

ゆうきの山

路と等々　トウトウ　シテ　聖

昔沈あるよ住

ゆうやおぐらへて浮世よ

もしもしもうはうや　白雲ハ

富士澤ぞぎ　富の山ひびきよ

人社みしれ　秋の末　まて　庭乃　ちる　菊

かたのの長者　ハル　ツキ　ウ　ひて　カバ　桜

よ　ハ　ハ　ち　ら　や　ガ　ア　内　昔　よ　ま　を　て

ち　ほ　の　せ　と　ば　ば　ら　ま　と　成　き　る

げ　と　塔　い　か　さ　ひ　く　黄　金　乃　き　く　へ

て　き　や　り　よ　ア　ル　を　仏　よ　平　向　つ　ば　ち　り

の　み　ら　よ　い　ら　ア　ル　下　ア　ル　ア　ル　下　三　三

よ　く　く

うつろふ色も深みぐさたゞひとしほの戀
偲ぶきみのまゝ夢ならばかゝるを
詠めつゝ四方の梢もちりうり
伴ひ出る道のべの草葉の色も月よ
うらひく下紅葉夜のまの露や染
つらん朝の原は昨日より色深
き紅を分行かたの山深み

げにや谷川に風のかけたるしがらみは
流れもやらぬ紅葉ばを渡らば錦
中絶えんとまづ木の下に立寄りて四
方の梢を詠めて暫くやすらへや

ワキ 紗立烏帽子 白鉢巻 厚板 大口 長絹 右ノ肩ヌギ 小刀 扇 弓矢持

一セイ サラリ ツヨク

面白や比は長月廿日のあまりよも
の木末も色々の錦をいろどる夕時
雨ぬれてや鹿の獨りなく声をしる

ワレ太刀持
素袍小刀
立衆四五人
素袍杖モツ

べうたりのもとに名ぶつて面白き氣色
うれしやセーモコ月ぬしてぽ鳥遊ようしよい嚴
鹿の鳴吹ぬ笛の音よ鈴の音ぬ
いさみたりとやまを心の
梅ちりぬ野に薄おもしろく行
あもとまさに山陰の道はさ
日きよ落つる鹿の様まわりぽ

のぽ心はよく誰
うあるは前に早あり山陰よ當
つく人歌ひ舞ひいろいろなる者ぞ名
を寿て教へ人いて名を教てい
へやぐるさに鶴の幕うちまり
屏風もとたく酒宴おろべとそてる
行よ憂よ寿ていへべりをべやちぞ

ぱさるは方と計ん　早　さうぎ
や洗あらうあらくた様の人は思ひも
よらぬ程ふくしあまど上蔵
乃道の過られ紅葉狩り酒宴のお
ぢなるべかりくハ等うう叶はまじと
上手門　馬より打りて酔ものぎ道を蘭
て山伝に器つかきぢどるふろ

づ器ぞ　ぞ　ぞ　

のべの侵よりうるはしく
うぐのなるや行しよ我をとどめ給ふ
べきとぱらぬやうこそるべ行うら
情あるけるや村雨の後宵の
樹の陰よりて一川の流
きもとしぬ酒をいでう見もて
べきたと甲斐なしづ
留むべきぱらぬ名木よあらばまこと
へ人ハ山路の菊の滴
よわくもこそあれ
あるべきうらやこをいと
ぱらぬもとべ捨がてきぱ入
青の蛍入深き数りの櫛くしや
材岡よ酒もあるめて紅葉をたく
とうやぱ面白やあるぱほのと

しとけ遊ぶ、しく袖も紅なる衣乃
くれなる井深きる泉べきの洗世て人
こゝ思ひきび隠うちちわぐ計ぞり
クセ
たさりきぐるよ人心。ぞたるよ、い作の
ウヤ
ぜまのつゆか討だちよりきもしパ思ひ
かいぜも盃よ。向へべかりる心ぜ、ウされバ私も
ココヨリ立
いゆ一めて道へ様くまれどよ

飲酒とやぶりおべる報恩寺詣をろ
たよ。花心乃花うづくかる姿ゆきよ
世ろも。だぐしあ桜よそ
い、ぶ上女ぶ上や男べ見
やるめもいうあ
とても。前世の契りぬ。
き惜しそ。ぐるおしも道の
ぐの草ぜまの露かぐともきそ

ぞ頼ゆかまとどちきるもたれ
うちつきをよ。人の心もちるもの立
つづくる雨をうふ。て時刻も
うつりゆく雲よ月の色をちり。数
かまちきの蔦城の。非乃歎りの
ようきをて。月の盃を独も。宮を
ゆくひ孤うれだ。くひ紅葉序詞中ノ章ノ三毛堺と紅

屏
長鎗ニ寄シ反ル
太刀持

堺青葉の地ル堺ひ紅葉をいたいの地
よ見宮門宮ゆ。ゆうう。ゆうう。
ぞ長尾の。お人。き山陰よ月ゆ
孤ゆうたねよ。独もつおよ
うー。夢ゲ。慣ゆ。鈴ゆ。
早上ニ。れ。ゆ。れ。ゆ。れ。ゆ。
酔ぶ。ぞ。ろ。ぞ。陰も。ぞ。中。よ。

太文
面しかし赤頭法被
半切 杖

ゆくりなく夢の告と地獄に落て苦しく
大乱きぞ天地も鳴動きぬもちてち
ぢぢさもさらあり山中ぞぼつぼつ
しやうぞ至上主ガラルヤ
岩ほよ火焔を放ちぞ
うつほもとつぞ感陽官の煙の中よ

七尺の屏風ひらりて具
たを一文の宝袋
当日月面をもくまのうぞなさ
働 ちれさらばもさるべして 雅持
もさもさわぎ給ひぞ南無やハ幡
大菩薩と心よ入会じ 剣をあいて待
かきぶんばば慶よおりんとやんで

大正貳年拾貳月壹日印刷
大正貳年拾貳月拾五日發行

複製不許

大阪府西成郡中津町大字下三番
七十六番屋敷
增補訂正
相讀者　大喜多信秀

大阪市北區源藏町十番地
發行者
兼印刷者　冨永久世

大阪府西成郡中津町大字下三番
七十六番屋敷
發行所　常磐會

273
148

終